会報 63号

aaca

親和銀行本店
懐霄館（エントランス）
白井晟一　設計
村井　修　撮影

CONTENTS

aaca第一回国際コンペティション2012		2～3
東日本大震災　被災地レポート		4～7
調査研究委員会　報告	高柳登美	
aaca東日本芸術環境復興支援団体　活動展	展覧会委員会	
寄稿　「閖上（ゆりあげ）まちカフェ」	柳澤陽子	
時代の華一輪		8～11
「壁画のいのち」	杉本　充	
「仕事への思い」	島田恭子	
「織物とコンピューター」	中野恵美子	
「グラッフィート技法を使った壁面」	谷口千恵子	
会員活動レポート		12～14
「平成２４年日本写真協会賞　功労賞受賞」	村井　修	
「美味しい美術館」の刊行	飯田郷介	
「奈良のアート村　視察レポート」	安河内敦子	
第178回　AACAフォーラム		15
「チベット文化から見えてくる今の日本」	岩佐寿弥	
第24回　建築と文化を語る夕べ		15
「人と人をつなぐ場を作るために」	藤江和子	
理事会報告・新入会員・会員の移動・募金のお願い		16

2012年11月

社団法人
日本建築美術工芸協会

aaca第一回国際コンペティション 2012

aaca 第一回 国際コンペティション2012
風景のRe-DESIGN・Re-Make・Re-Structure
—わくわくする風景を創る—

昨年の東北大震災によって、一瞬のうちに破壊されてしまった街や村の風景を目の当たりにして 体の中で何か価値観が変わったと感じた方は多かったのではないでしょうか。私たちは今回のような自然災害によって大切にしてきた風景を数え切れない程失ってきました。しかし、自然災害だけでなく「都市再開発」等の理由で人為的に失ってきた風景も数え切れません。

今回のコンペは、建築・美術・工芸等アートの力やアイデアで魅力的な街の風景を創りだそうとするものです。

ちょっとした『一言』が人生を大きく変えるように、一つの彫刻・一本の木あるいはウィットにとんだアイデアが街全体の活性化に貢献するかもしれません。　「街が汚いのは仕方ないよ！俺の責任じゃないよ！」

「自分ひとりの力ではどうにもならないよ」などと諦めていませんか？

ごみ箱のデザインバス停の椅子、あるいは道路の色彩等今まで気にしていなかった片隅の風景、あるいは大胆な発想で風景を変えるなど、常識にとらわれない新しい提案を求めました。

■ 応募結果　　エントリー数　189人、　応募申込み　151人、　作品応募数　92作品

■ 審査　審査委員長　芦原太郎(建築家)、
　　審査委員　　佐藤可士和(グラフィックデザイナー)、 藤本壮介(建築家)、 面出　薫(照明デザイナー)

■ 審査結果 (作者名は代表者・順不同)

＊最優秀賞	該当作品	なし
＊優秀賞 ・芦 原 太 郎 奨励賞	上野裕治	比礼カカシ・プロジェクト
＊優秀賞 ・面 出　薫　奨励賞	手嶋伸幸	細長いイキモノは街の中に住む
＊優秀賞 ・藤 本 壮 介 奨励賞	原嶋宏樹	トウキョウコメクション
＊優秀賞 ・佐藤可士和 奨励賞	江野慎吾	光差し、隣人を想う
＊AACA特別賞	宮下信顕	ＩＴ マンホール

＊佳　作

上野裕治	みしま竹あかり街道	青木駿亮	Emptiness is more
仲俣直紀	線の街	赤澤知也	イノチシルベ
島田雄太	うつろうたまり	高島英朗	リフレーミングによる地域シェアのかたち
西田磨里子	GAOOOO!!!	桐越奈緒子	Change from New York Times Square
Ronnie Sit	Rainbow Railway	桜井悠一	本の生まれ変わる場所

＊入　選

垣中智博	住戸と街の間	後藤恭代	BUSTOP!
鍵井保秀	ある町の幼稚園、保育園の制服	平尾雅之	車の屋根が街の風景をつくる
鈴木政博	傘もよう	飯田周悟	TO EDIT SCENERY, TO EDIT DISTANCE
菊竹　雪	BANDAGE	山岡　智	歴史ある名橋「瀬田の唐橋」を木造橋に
四宮健次	「カテイ」の物語	織田詠美	堀之内公園活性化プロジェクト
向井太一	まちのジャングルジム	入江　曜	Re-design the festival and the city
小林洋樹	TIME TUNNEL	近畿大学松岡研究室	抜け／囲みのある町
野村祐志	あるくみちのはし	北村知佳子	ある朝、ラテで花をつくってみたら
松本幸司	樹擁壁	小池俊幸	花咲く囲い
中原文雄	無題		

■表彰式　　平成24年10月18日　18:00～20:00　　建築会館ギャラリー　中庭

■ 作品展示（入選作以上）　平成24年10月18日～11月4日　10:00～18:00　　建築会館ギャラリー

■ 優秀賞 受賞作品

優秀賞 ・ 芦 原 太 郎 奨励賞

「 比礼カカシ・プロジェクト 」　上野裕治

優秀賞 ・面 出　薫　奨励賞

「 細長いイキモノは街の中に住む 」　手嶋伸幸

優秀賞 ・藤 本 壮 介 奨励賞

「 トウキョウコメクション 」　原嶋宏樹・高橋朋広

佐藤可士和 奨励賞

「 光差し　隣人を想う 」
江野慎吾　　一條真人
多和田智希　森田　慧

■ AACA賞特別賞　受賞作品

「ＩＴマンホール 」 宮下信顕・吉本晃一郎

東日本大震災　被災地レポート

調査研究委員会

高柳登美
ガーデンデザイナー・画家
日本建築美術工芸協会会員
調査研究委員会委員

私たちのみた宮城の海岸線の津々浦々の集落や街はすべて、人々の暮らしのあとを消失していました。大震災勃発からほぼ一年半を経過したその日、街や集落の震災の瓦礫は現場から片づけられ、みちのくの山並も空も海も夏の陽に美しくかがやいて、あの日、一瞬にして万を超えるいのちを奪った震災の凄惨はうそのようです。

しかし女川や石巻、南三陸町、閖上などほぼ壊滅した海辺の市街地のあとでは、取り残された鉄筋の建物のいくつかが現実にはありえない形で無惨な姿をさらし、津波のすさまじい現実を語っていました。歴史ある天然スレートの産地、雄勝もまた役場と記念館のみをのこす廃墟の街でした。それでも新東京駅舎の屋根材として搬出を終えた後だったのは「幸運」なことでした。

この旅は仙台在住の会員　建築家氏家清一氏が所員の市川氏を伴い精力的に車を駆って、私たち調査研究委員会一行六名を率い、初日は東松島―野蒜―石巻―女川――雄勝―南三陸町を回り、がれきは片付けられたまま、復興計画が纏まらず建築制限により放置された、一面の原野のような被災地を視察しました。

← 野蒜地区
津波被災の住宅

石巻旧北上川中州 →
（日和山公園より）

← 雄勝町
雄勝産業記念館
↓　南三陸町
旧町役場にて

そして翌日は亘理―閖上を訪ね、復興非営利法人「わたり・あらはま」を主宰し復興に力を尽くしておいでの、建築家渋谷　尚氏、閖上地区で「ゆりあげまちカフェ」を開設、地域の避難住民・子供たちとボランティアとの交流や、地域のコミュニティーの構築に尽力されている建築家柳澤陽子氏(針生陽子氏)、閖上朝市が被災したため、仮設店舗を開設運営しているゆりあげ港朝市共同組合代表理事　桜井広行氏等との出会いをセッティングされ、三人の方から私たちは、復興にかける東北の人の魂にも触れる事ができました。

↑荒浜地区被災後

わたり温泉付近にて→

←荒浜地区住宅街

亘理あらはま海岸の美しい海辺の光景を目にしながら、山崎氏は何度となく、「ここにあった住宅は全て津波にもっていかれました。」と語られました。

無念がせまります。四百年に一度はやってくるという津波の災厄に不運に遭遇してしまった東北の人々。

営々として築きあげたすべてが多くの命を道連れに津波にもっていかれました。そしていま、思いがけない場所に身を潜めるようにして建つ仮設住宅をあちこちで目にしました。海沿いの街のあとに夏草の茂るのを目にしては、一行のだれかれとなく「国破れて山河あり」の詩句を思わずにはいられませんでした。

山崎氏は津波の3日後には、亘理を中心につぶさに住宅の被害調査に邁進。瓦礫に埋め尽くされた道を乗り越え、すさまじい悪臭のなか、逃げ遅れた方々の死骸を目にしながらの作業だったといいます。そんななか、復興の作業は続けられ、今があります。東北の人々の忍耐と強靭さを思います。

しかし以後、海沿いの市街地住宅の復旧は停滞しており、それは地盤沈下への対処や復興計画など地域との対話の遅れの問題からきています。官民一体となった方向性が見えてこないのです。

なんとか復興の先鞭をつけたように見えるのが亘理地区と閖上地区ですが、亘理の場合は渋谷氏が中心となり、官民一体となり前向きに動きはじめています。

↑　閖上地区　被災後空撮

閖上地区では民意を逆なでするようにして、建設界など複雑な思惑が渦巻くなか、高さ7メートルの防潮堤防の築造や広大な住宅地一帯のかさあげを、一体化させた計画と試験工事が着々と進行しています。この事業は国交省、ゼネコン、コンサルが強固な一体となって進めており、この全体像において市民の描く未来への希望も展望もまったく蚊帳の外ー、海中の風力発電や「陸の浮島」計画など、将来への豊かな展望を柳澤氏はあつく語ってくれましたが、実現の可能性「ただいまゼロ」との事です。

復興の動きを妨げる動きはまだほかにもあり、さしもの柳澤氏でさえも「中央からくる学者やら文化人は様々な提言をしては去ってゆき、地元の事情や人々の思いを汲むこともせず、困りものでありこそすれ何の役にもたたないー。」と、憤懣やるかたない口ぶり。この思いは、地元で復興に力をつくしておいでの関係の方々も同じようです。

東北の人の心意気を感じつつも、いくつもの問題を目のあたりにした震災復興地域「視察」でしたが、国の政治の貧困ー、問題はこれにつきます。

国の将来をみすえた力のある政治家の登場が期待されます。

閖上日和山神社にて→

←閖上住宅街
閖上日和山神社より

aaca東日本芸術環境復興支援団体 活動展

平成24年度通常総会にて決議されました、23年度支援金50万円は、協会会員から推薦された14団体の中から、次の団体に対し活動支援金として預託することに決定いたしました。

■支援団体

①閖上まちカフェ（氏家清一会員推薦）
宮城県名取市閖上1-1上町集会所
代表者　柳澤陽子(針生承一建築研究所代表補佐)
壊滅的な被災地の中で、避難住民・地域の人々に休憩所やコミュニティーとしての場を提供し、サポートをしている。　又、住民や子ども達と復興の為の企画や情報を発信する場として活動している。
＊活動報告は、次ページに掲載。

②りょうぜん里山がっこう（聞地紀以子会員推薦）
福島県伊達市霊山町大石綱倉17
NPO法人「りょうぜん里山がっこう」
代表者 菅野偉男
放射能汚染地域の子供たちの健康を守るため、各地で疎開キャンプを開設、避難先より子供・家族を集め陶芸等体験教室を実施、文化の継承を実践している。

③こども写真プロジェクト（大田敏雄会員推薦）
神奈川県相模原市中央区東淵野辺5-15-26-102
「こどもカメラマンプロジェクト」代表者 石原理恵
南気仙沼小学校の子供たちが、被災後インスタントカメラで「笑顔」「がんばっている人」「気仙沼の風景」等、避難住民らの表情やボランティアの活動を写した写真展を全国各地で開催し、「震災で悲し思いをしながら笑顔で応じてくれた表情」を 多くの人々に伝え、子供の感性を通じて被災地の表情を伝えている。　会場で募金やTシャツを販売した善意を同小に贈り、教材・文具の購入に充ている。

寄稿　閖上まちカフェ　（ゆりあげまちかふぇ）

柳澤　陽子
針生承一建築研究所　副代表
日本建築家協会会員　宮城県地域会
閖上まちカフェ　代表

昨年の３・１１東日本大震災により、失われてしまった名取市閖上のまち。震災直後のガレキと化し、ガレキに埋め尽くされたまちが、徐々に復旧作業が進められて行きました。海寄りの地域は、ほぼコンクリートの基礎が残るばかりで液状化し沈下した地盤で、でこぼこの道をそれでもも辿って、被災者が我が家の跡に呆然として声も無く佇む姿がみられるようになりました。

廻りはどこまでも荒野と化し無常感が深く漂う様子を見るにつけ、そのままの気分で仮設住宅に戻って行くのは辛いであろうと感じさせられました。トイレがあったら

トイレがあったら助かるであろう…

一寸一休みして心を落ち着ける時間が持てたら良いののでは…　　誰かと話しをする事で心を解放する事が出来るのでは…、

JIA(日本建築家協会)東北支部宮城地域会復興支援委員会を立上げ、地域に入ってボランティア活動を始めておりまして、委員長・針生承一の提案で閖上まちカフェをることになりました。（石巻まちカフェ・亘理まちカフェの３箇所に）

閖上まちカフェは、被災地の直中で津波に呑まれながらも建ち残った上町町内会集会所を借りる事ができまして、床下の泥払い、床の張り替え、サッシ・ガラスの復旧工事を行い何とか使える程度の改修を施しスタートしました。

家具は岡村製作所が支援下さいました。

「閖上まちカフェ」スタート時のポスターです。

閖上まちカフェ　オープン　2011、08、07(日)13:00～
・閖上のこれからのまちづくりについて
一、様々な事例や情報を集めて発信するカフェ
一、住民の皆さんの生の意見を聞き、紹介するカフェ
一、コーヒーやお茶を飲みながらみんなでお話しするカフェ

地元宮城県の建築家や大学関係の研究者たちが中心となって、閖上の未来に向けたまちづくりを皆さんと一緒に考えるカフェです。被災して微塵のまちとなった閖上、友人知人の家や仮設等バラバラになった方々に、支えあって、助け合って、閖上げに戻って来て欲しい…

お茶を飲みながらのんびりとしたひとときを、是非お気軽にお立ち寄りください。

閖上まちカフェは大々的に宣伝して人を集めることを目的にした訳ではありません。被災者の中には怖くてトラウマ状態で閖上の地に足を踏み込む事さえ出来なくなっている方々がいらっしゃいます。また、子どもを津波に持って行かれた母親は毎日毎日被災地にやって来るのです。人々の想いは様々でした。　話したない人にはゆっくり時間を過ごして頂くことだけでした。

８月の暑い時期、まちカフェに来て昼寝をする事を楽しみに通ってくるご夫妻がいらっしゃいました。「やっぱり、閖上の風は気持ち良いねー。浜風はなんて気持ち良かったことか。」と言って、狭い仮設住宅から逃れて時間を過ごして行かれたそうです。

９月に入り「落語会」を開催、訪れた被災者から「震災後、心の底から笑えたのは初めてだ。本当に楽しかった。ありがとう」と言われました。
皆さんが楽しく過ごして下さり、本当に良かったと思うイベントでした。落語会は好評で3回程公演しています。

芸能人の支援や勉強会や体操・ダンス等身体のケア多岐に亘る方々が支援に来て下さっています。

直接声を掛けられ、一緒に歌い重い気持ちを軽くして帰って行かれる被災者に、ボランティア活動されている方々も何より来た甲斐を感じて下さっています。

支援物資配布所として、昨年9月末～12月15日まで、被災者の為に支援物資配布所として活動しました。着のみ着のまま、身一つで逃げた被災者は家も着物も何もかも失くしてしまったことで、何かを手にし所有することも一つの気休めになっていた様に見受けられました。頂く事で安心できる…そのような境遇にあったのでしょう。全国各地からの支援には本当に頭の下がる思いで配布の準備をした、感謝感謝で涙を流しながら支援品を並べていたと針生　環(娘)は言っておりました。

閖上まちカフェの存在が次第に地域に浸透してきました。

昨年の夏、地域の灯篭流し・花火大会によりお盆の追悼イベントが開催されました。閖上まちカフェの直ぐ近くの閖上中学校（現在は廃校）が会場でした。

１年目の3･11、震災後初めて「ゆりあげ港朝市」が以前の場所で開催されました。朝市協同組合理事長より「閖上まちカフェさんも朝市会場で一緒に参加して、喫茶店を有料で良いですからやって下さい。」との依頼で譲り受けたモンゴルのゲルを張り閖上カフェを開業、１杯100円のコーヒー・チャイ・揚げバナナ等々、慣れないメンバーのボランティア活動でしたが、沢山の方が立ち寄り「いつもありがとうね。」と声を掛けて頂き、嬉しいことでした。

現在「閖上まちカフェ」では、まちづくり勉強会・閖上子ども会議を開催し、閖上の被災者で幾つかの団体が閖上まちカフェを集会所として利用しながら今後の復興まちづくりの話し合いが行われており、閖上中学校の仲間達・今は高校１年生となったメンバー15名程が集まり、自分達のまちの復興について考える機会を設けました。今、15歳の子どもたちが20歳若しくは25歳となる頃に、閖上のまちが何らかの形で目に見えてくるのでしょう。その時から本当の意味での「まちづくり」が始まります。

戻って来た人・新しく入って来る人達が集まってまちに息を吹き込んで行く為にも、時代を担う若者として今から一緒に考えておこうよ！と言って呼びかけて始めた会です。

地域の被災者や子どもたちの描く閖上復興計画の完成まで支援しサポート・指導を続ける予定です。

建築家協会の発案でスタートしましたが、地元の建築家は日々に追われてまちカフェのようなボランティア活動にまでは手が廻らないのが実情です。
１年間を目途に考えており、石巻まちカフェは地元のNPOに運営が移りました。閖上まちカフェもJIAに頼っていられず、代表には私が引継ぎました。

スタート時より毎日閖上まちカフェに通い、今ではまちカフェの顔となり地域の方々に係わって信頼関係を築いてきた針生　環を主体に運営を続けております。NPOでもなく、只今は非常に個人的なレベルでの運営と言えます。運営資金の調達はなかなか厳しい状態です。遅々として進まぬ復興ですが、その間閖上まちカフェは被災者と共に存在する意義が大きくなって来ております。

この活動にご理解頂ける皆さまからの支援は大変有り難く思います。

復興まちづくりが具体化する時期ですが、この１年間の復興に対する国の政策には非常に疑問が残ります。

地元住民の声を聞く事も無く作られて行くまちになって行く様を知らん顔して眺めている事も出来ません。

まちが出来そこに人々が住んで初めてまちが創られる。

住む必要のない人が、幾ら素晴らしい未来型のまちの提案をしたとて意味が無いのではないでしょうか。
住む必要のない人が、幾ら素晴らしい未来型のまちの提案をしたとて意味が無いのではないでしょうか。
地域には地域のエゴもあり、身の丈の生活に有ったまちが欲しいと住民は言っているのです。

誰もが東京のような大都会にあこがれている訳ではないのです。
閖上の浜の住人にはそれが全てではありません。
子どもたちも「今は親の意見に従って行くことしかできないけど、それでも自分が年取ったら閖上に住んでいるんじゃないかと思う。」そのような発言も有ります。

そんな住民の想いを受け止めた計画に少しでも近づくよう、私共はこれからも応援して行きたいのです。

如何にも小さな力で、行政に対しての発言力も説得力も持たない状況です。

皆さまからのお知恵でそんな手助けを支援頂けます様よろしくお願い申し上げます。

閖上まちカフェ

③
モンゴル・ゲル

まちづくり勉強会

閖上こども会議

閖上ルネッサンス計画（閖上まちづくりを考える会）

土地利用構想図

構想スケッチ

「壁画のいのち」

杉本 充
画家
日本建築美術工芸協会会員
中部デザイン協会会員

今年、名古屋では駅前のシンボルとも言われた大名古屋ビルヂングが９月末で５０年の歴史に幕を閉じ、建て替えられることが話題になっています。この建て替えにともなって１階ホールにあるモザイク壁画（「海」矢橋六郎作）が取り壊されることも案じられています。

矢橋先生は中部地方を中心に多くのモザイク壁画を制作されました。その中には代表作とされる名古屋駅新幹線ロビーの壁画「日月と東海の四季」がありました。

新幹線を利用する人々が作者を知らずとも、「あの壁画の前で！」と待ち合わせの目印にして親しまれていたものです。大理石に金銀をあしらい、豪華な印象を与える大作でした。改装時に惜しまれながら姿を消しています。1964年の制作ですから約40年の「いのち」だったということになります。

壁画の寿命というようなことを考えるようになったのはいつ頃だったのでしょうか。ここに掲載した作品は私にとって最初の現場制作となったモザイク壁画です。大学院壁画専攻のコースを修了して就職した、保育系の短大の図書館に設置されたものです。実は、この図書館は現在使われていません。市立の三大学の統廃合で短大は統合吸収されたからです。まだ完全に壊されてはいないようですが、廃屋同然の建物に取り残されていると聞けば、やるせない思いです。

まだ学生だった頃、「壁画は永遠に残る仕事だ」と聞き、自分自身も単純にそう考えていたと思います。その思いは今日とはやや異なっています。

壁画の素材と技術はまず耐久性を一番に考えます。私はモザイクを主に制作してきましたが、現在、美大でフレスコ画の講座を担当していることもあり、フレスコとテンペラの制作も手がけるようになっています。このフレスコも美しい色彩をほぼ永久に保つ技法と考えられています。色は壁に付着するのではなく、顔料は水とともにしみ込んでのち炭酸カルシウムの皮膜につつまれて定着し、壁と一体化するからだと説明されます。（実際はテンペラを併用した作品が多く、こうした説明通りではありませんが）

先年、イタリアに旅行して、フレスコ画もモザイク画もきちんとした修復を受けてこそ、こうした「永遠の輝き」を保っているのだと実感しました。保存の処置をされない限り、壁画はタブローよりも過酷な環境にある分、破損を免れていないのです。フレスコ画は洪水や地震の被害に遭うだけでなく、壁にモルタルを塗って上描きができるという簡便さも災いする場合があり、著名な作家の作品も塗り替えられてしまうことがあります。

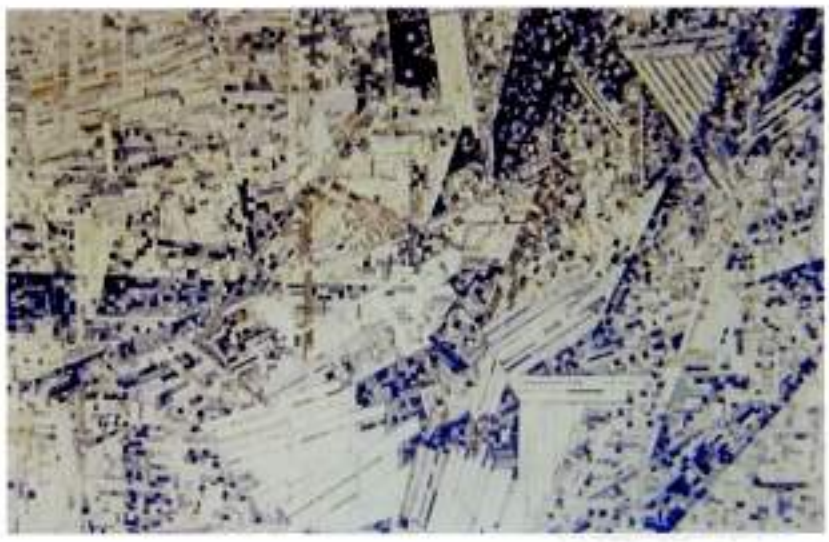
今日、残されているものは後世の人々に保存すべき作品と認められ、幸運にも様々な被害を受けずに済んでいる「永遠のフレスコ」なのです。

フレスコ画を保存するためにストラッポという技法が生まれ、一時期盛んに壁画の修復に用いられました。壁から彩色層だけを剥がしとる技術です。しかし、壁から剥がされた作品はやはり壁画としての味わいを損ねてしまいがちです。

私にとっては印象深いことですが、イタリアを旅行していて保存のための処置がされず、かなり傷んだ状態のフレスコ画をいくつか目にしました。その一つは彩色層が剥がれ、人物像の一部が確認できるものの、衣装や道具立て、背景等の描写のほとんどが失われたものでしたが、私には非常に美しく感じられました。作者もよく知らず、主題もわかりませんが、その時、これは壁画の本当のいのちを全うする姿だと感じたのです。

先述したように、耐久性があっても場合によればタブローよりもはるかに短い寿命の壁画も珍しくはないのです。壁画の「いのち(生命)」は建築のいのちでもあり、多くは建築と命運をともにします。耐久材ゆえにかえって残らないというのは皮肉ですが、壁画の宿命とも言えます。

ただ、幸いに建物が残り、かなり傷んだとしても壁画がそのままに残された時、私達はそこに壁画の真の永遠性を感じ取ることができます。壁の土の感触や、大理石の一片の輝きに、この素材を生かすことが、壁画にいのちを与えることだと知っていた先人の力量をみることができるからです。　　（すぎもと　みつる）



「象(かたち)」　大理石モザイク　238x334cm　1983年制作

設置風景
旧名古屋市立保育短期大学
図書館２F内部

時代の華一輪

「仕事への思い」

島田恭子
陶芸家
日本建築美術工芸協会会員

「窯出し」と言うのは、毎回何度経験しても手放しでハッピーという気分にはしてくれない。ほとんどが「こんなはずでなかった」と作品を出さずそのまま扉をしめてしまいたくなるほどの気分になることがほとんどである。

制作している時は、「これはいいかも・・」などと期待してもほとんどが錯覚であったと思い知らされるのだ。しかし個展には作品を選ぶだけの余裕はなく、全精力を使って制作した作品である。その全てを見ていただくことになる。

そのような訳で実は個展の初日は何とも落ち着かず、まるで裸を見られるような恥ずかしさがある。作品に対しても「こんなはずでなかった」と八つ当たりに似た感情で直視できない。しかし個展も中盤になりひとり会場にいることが多くなると、自分の作品とあらためて向かい合う時間ができ、少しずつ気持ちが変化してくる。ひとつひとつの作品にどんな思いで向かい制作したかあらためて思い出され、違った良さも見えたりして、それぞれが愛おしくなってくるのである。

自分の作品は紛れも無く自分自身が生み出したもので、その全てが今の自分の力であり、私自身である。だから恥ずかしいのであるが、ある意味どれだけさらけ出せるかと言うことが作家の宿命なのかも知れないと思う。

作品の表現は自分自身のセンスである。他のどんな素晴らしい作品に憧れても自分のセンスは超えられない。だとしたら「これが私」と開き直るしかない。自分が何を好きで何が気持ちがいいのか、その生理をありのままに作品に映し、制作し続けることでしかない。

私の故郷は、平安のころより「西の吉野、東の桜川」と言われたヤマザクラの多いところである。　室町時代世阿弥が書いた謡曲「桜川」の舞台でもあるので、最近の町村合併の折、岩瀬町から桜川市と名前が変わった。

子供のころ田植え時期になると、野山にもくもくと湧き出す桜の塊を心躍る気持ちで見ていたのをはっきりと覚えている。その原風景が文様の原点になっている。

そして今もそれぞれの四季で楽しませてくれる花々に囲まれ、自然豊かな益子で制作出来ることを幸せに思っている。

「櫻文器」　W40×D25×H59

「楢文器」W47×D21×H62

「芒文器」W44×D20×H50

「牡丹文器」W36×D21×H63

「織物とコンピューター」

中野恵美子
織造形作家
日本テキスタイルカウンシル会員
日本建築美術工芸協会会員
元東京造形大学教授

織物で文様を織り出す方法に、緯糸（よこいと）で絵を描くように織る「綴織」と経糸（たていと）の浮き沈みで柄を出していく「紋織」がある。前者は羊毛が中心の西側の地域で発展し、後者は絹糸が中心の中国で発展した。紋織には高機（たかはた）の上部で人が経糸の操作をする空引機（そらひきばた）が用いられた。正倉院に伝わる裂（きれ）はこの方法による。製織技術は絹織物と共に日本はもとより西側にも伝わり、18世紀以降フランスのリヨンで様々な改良が行われて来た。織機の上部にあった操作用の台を織機の横に置くなど操作しやすいように色々と工夫されている。その過程の中で、穴をあけた紋紙（もんがみ）の操作で織る方法が1801年にジョセフ・マリー・ジャカールにより発明された。ジャカード織といわれる複雑な織物は、この装置の発明者の名に由来する。

織は経糸と緯糸を直角に交差させて布にすることをいうが、経糸が出るか出ないか、つまり二進法の世界である。ジャカールが考案した紋紙はまさにそのバイナリーな世界であった。これが自動計算機のもととなり、コンピューターの発展へとつながる。その意味ではコンピューターと織は相性がいい。

パーソナルコンピューターの普及と織のソフトの開発で、膨大な紋紙の枚数を要する一枚柄のものも紋紙無しで織れるようになり、しかも工場でなければ織る事ができないと思われていたジャカード織が、我々手織りを手がけるものにも取組めるようなった。1998年にそのコンピューター連動のジャカード織に出会い、写真を織る事の可能性を知った。南米の各地やアジアを訪れた際の写真を織ってみたい、自分史のようなものができればと、カナダのモントリオールにある「モントリオール現代テキスタイルセンター」で、夏期に行なわれるワークショップに1999年に初めて参加した。指導者のルイーズ・L・ベルベ氏は織のソフト（ポワンカレ）の開発に初期の段階で作家として関わったというパイオニア的存在である。当時コンピューターの表示は仏語、ソフトと説明は英語であった。そういう中でのスタートだったが、コンピューターの操作はもとより織のソフトの扱いもわからずかなり悪戦苦闘した。わからないのなら、人より三倍時間をかければよいと覚悟を決め今日に至っている。その間、パソコンはもとよりソフトも、さらにはベルベ氏の指導もバージョンアップをし、世界各地からの受講生の参加もあり、同センターは文字通り発信地的な存在になっている。

2010年9月にカナダ大使館高円宮記念ギャラリーで「ジャカード2×2　モントリオール：東京」展がカナダ人2名（ルイーズ・L・ベルベ、ジュリアナ・ジョーズ）、日本人2名（阿久津光子、中野恵美子）の4人により行なわれた。その展覧会の2～3年前から、平板になりがちなジャカード織に質感を織り込みたいと、様々なテスト織を行なっていた。日頃の作品制作では和紙と強撚糸を用いてできた布を温湯につけ、縮ませ、物理的変化を作品に取り込み、テクスチャーのある作品を制作している。和紙は丈夫で製織されていれば濡れていても引っ張らない限り破れない。アメリカで「紙布」のワークショップを行なった際、その温湯に浸ける工程を皆の前で行なった。洋紙しか知らない彼らは織物がくずれてしまうと心配してくれた。が、目の前で生き物のように縮んでいく布の様子を見て、皆珍しそうにしていた。

そのようなことがジャカード織で、織組織と素材の関係でできないかと、とにかくいろいろな事を試していた。ようやく形になりかけていた時に展覧会の話があり、早速、イースター島のモアイ像のシリーズをその方法で織り出品した。草、苔は白く浮き出て、黒い影は奥に引っ込む。厚さは少ないが立体感が出るようになった。同展はその後カナダのケベック州の4カ所に巡回し、多くの方々にご高覧いただくことができた。

2012年の8月にはＩＴ産業で有名なシリコンバレーのサンジョセにあるテキスタイルのミュージアムで「インターナショナル・TECH（テック）スタイルアート・ビエンナーレ」展が開かれ、拙作も3点が展示され、はるばる展覧会を見に行って来た。LEDを布にとりこんだり、人が近づくとセンサーが反応して柄が浮かび上がったり、蓄光糸が織り込まれたりと、デジタル系の様々なテキスタイルの作品が展示されていた。

ジャカード織というと機械が勝手に織ると思われがちだが、私が取組んでいるのは経糸の上げ下げの指示をコンピューターがやってくれるというだけで、作図、組織入れをシコシコとパソコンで行い、織るのは人間の手であり、素材も綿、麻、ウールといった至って手織りに近いことをやっている。

目下、文字を布の中に彫り込むようなことに,挑戦している。

「カンボジア便り」
130 (H) ×85 (W) cm

「グラッフィート技法を使った壁面」

谷口千恵子
美術家
日本美術家連盟会員
日本建築美術工芸協会会員

先史以来、人類の根源の表現の中には線を刻むという行為があります。

旧石器時代洞窟の河床で発見された砕石斧、骨やトナカイの角に表わされた数千の線刻画や、洞窟に描かれた壁画、私たちの祖先が作った縄文土器、土偶にも見られるように線を刻み掻く行為は、描く一線を引く、色を乗せる面を塗ることと共に、ごく小さいが手を動かした痕跡がごく薄い凸凹を伴い根源の自らの動きと存在を確認するものでも有ります。

ギリシャ陶器にはアッティカ式黒陶に引っ掻く線で優雅に表現されました。またエトルスク時代のブッケロ式陶器に刻線による装飾が残され、また後の彩色された地下墳墓には形の輪郭に下書き線刻し彩色された壁画が有ります。

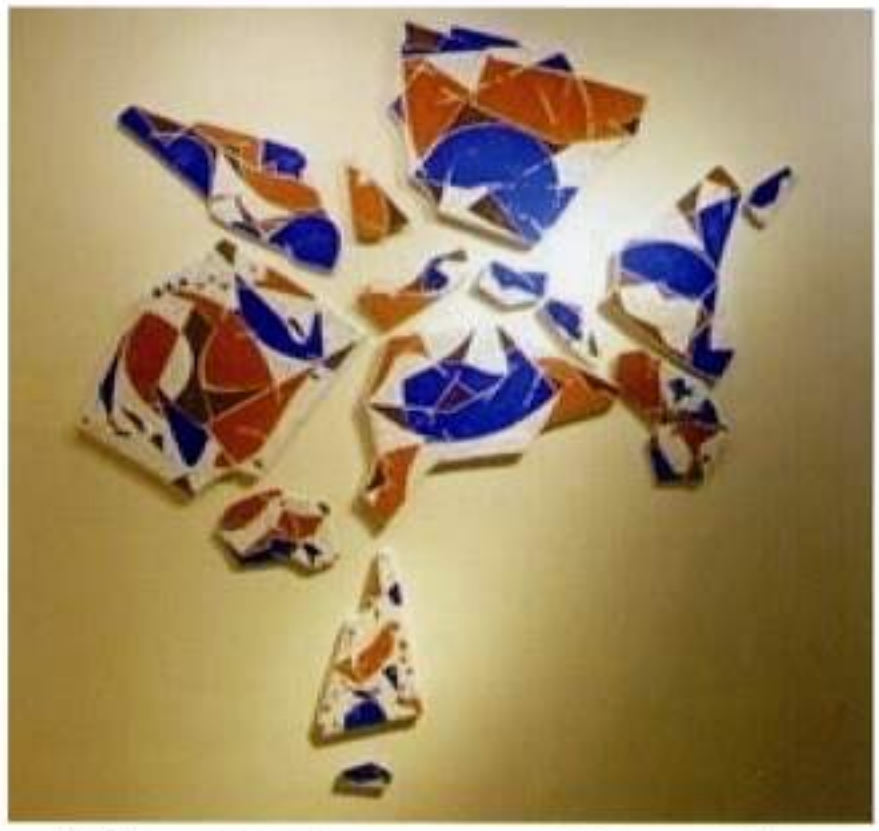
エトルスク時代を受け継いだローマ時代には住宅や宮殿にはフレスコ画が描かれ、ポンペイの遺跡に残る壁画にも下書き線刻が見られる事もあります。また陶器の歴史の中に１０世紀～１２世紀、中東イランのガルス手や中国の北宋時代、磁州窯の白化粧等、ルネッサンス時代に至る文化の共通した流れも考えられます。

偉大なルネッサンスの画家たちが多くの作品を残したフレスコ画は良く知られていますが、下絵を写す技法として線描を施した「インチジョーネ」として壁面の中にデッサンの線の跡が見られます。また当時の画家たちは「グロテスク紋様」と言われるローマ時代の壁面に使われ、当時発掘されたネロ皇帝の宮殿「ドムス・アウレア」の壁面装飾に興味を持ち、多くの建築の壁面に新しい表現として取り入れました。それは西洋の絵画表現の基となった３次元を秩序と合理性で画面の上に再現するだけでなく、画面では表現できなかった空想的な、現実ではありえない混合された、植物でもなく動物でもない生き物や形、「植物が動物に変化する」などの地に着かない浮遊する紋様として展開し、生命の動き、挑戦、遊び、快楽などの命の動きを陽気な軽さや衝動を伴って形となった自由な発想で表現しました。

「グラッフィート技法」は、このグロテスク紋様をモノトーン、グレーの下地の上に白い石灰で塗り、形の周りの面を掻き落とし、下地のグレートーンと共に残した１５世紀～１６世紀にかけて外壁の装飾として広まったものです。

私の作品はこの自由な現実に無い形、現実に有る形、自分にとっての時間の蓄積をグラッフィート技法を用い、断片的な知覚や記憶の集りのイメージとして組み合わせ、こだわりを線刻し面を掻き取る事で形を起こし、もう一つフレスコ画の大きな要素としての「色面」の強さという光を吸収する質、この２つの構成で表現したものです。下地はテラコッタで任意の形で作ったものを使い厚みを持たせました。

線刻する行為は、あたかも自分の呼吸、感情が具体的な物質の跡となって残る、発見と感動を伴うものですが、１つ１つの形の中の時間と記憶の微細なこのような線刻の痕跡と、平面の無限の「青」、大地の「代赭」の２つの色の面で完結された大小の断片がさらに様々な空間の広がりの中での配置によって動きを出し、近くから見れば線刻と色面で完結し、遠くから見た時の大きな空間の中では全体のリズムとなって断片から断片へ視点が移動するという、継続した時間に浮遊感を加えて見えることを考えたものです。



「軌跡」 190×160cm　フレスコ（グラッフィート）

会員活動レポート

平成２４年　日本写真協会賞　功労賞　受賞

村井　修
写真家
日本写真協会会員
日本建築美術工芸協会会員

建築・彫刻・街並みを対象に制作活動を行い、半世紀を超える長きにわたって建築写真の第一人者として活躍するとともに、大学で後生の指導にあたるなど、写真文化の向上に寄与した功績に対し授与された。

略歴：1950　東京写真工専(現東京工芸大学)卒業
1953　フリーランスとして建築誌・美術誌等の撮影を始める
1957　旧都庁舎を始め、丹下健三氏の主な作品を撮影
1967　"LIFE"誌の連載テーマ「家族」の日本編を担当その後、フォーチュン誌の撮影にも従事
1968～90　東京写真短期大学にて写真制作の教育に当る
1981　パリ・ロダン美術館「佐藤忠良展」ポスター担当
1983　第37回毎日出版文化賞特別賞受賞
2010　日本建築学会文化賞受賞

東京カテドラル
聖マリア大聖堂
丹下健三　設計
村井　修　撮影

親和銀行本店
懐霄館（サロン）
白井晟一　設計
村井　修　撮影

（公益社団法人　日本写真協会：昭和25(1950)年に設立、わが国の代表的な写真家によって組織され、写真家の職能と地位の確立、著作権の確保と啓蒙活動、写真の歴史と表現に関する写真展開催と出版、写真技術に関する調査研究と人材の育成、国際交流、出版活動とインターネットによる情報の発信などの活動を展開しています。さらに写真美術館の設立運動、写真原板を保存する日本写真保存センター」の創設を図るなど、わが国の写真文化の発展に寄与する活動を積極的に行ってなっている団体です。）

会員活動レポート

「美味しい美術館」（美術館の雑学ノート）の刊行

飯田郷介
建築家
㈱大林組
日本建築美術工芸協会会員

建築・美術・工芸そして食にまつわる本を11月21日自費出版しました。私は美術館巡りが趣味で、今までに国内外の美術館・博物館を600館以上見てきました。そしてそれが六花亭製菓の美術館づくりの仕事に繋がり、2009年には六花亭製菓「中札内美術村」「六花の森」がAACA賞特別賞を受賞しました。。

今までの美術館づくりの仕事を通じて、私は美術、美術館、建築家などの多くの人・ものを繋いだ、私なりの美術館紹介の本を書きたいとの思いがありました。

それは昔、グリコキャラメルの広告で「一粒で二度美味しい」という、キャッチコピーがありましたが、美術館も「作品を鑑賞して」「建築空間に感動して」「美味しい食事を堪能して」、一館で三度四度美味しい「美味しい美術館」を紹介していきたいと考えました。

そこで本書ではそれぞれの美術館の紹介を「美術館の紹介」「美術館の建築と建築家」「美術館のレストラン」そして「散策のヒント」の四つの切り口で構成しました。

限られた紙面ですが、「美味しい美術館」を少しつまみ食いしてみますと、日本最初の公立近代美術館「神奈川県立近代美術館」では、開館当初、厳しい予算の中で、建物に冷暖房がなく、完備された収蔵庫もなく、また荷解き室、学芸員室もない中での学芸員の方々のご苦労を紹介し、美術館を設計した坂倉準三を「ル・コルビュジェの下で初めて建築を学んだ美学美術史学生」として紹介しています。やはりコルビュジェの下で学んだ前川國男は「美味しい人間」と紹介し、前川が設計した山梨県立美術館では、ミレーの作品紹介から画家フォンタネージの生い立ちにまで話が広がっています。

東京国立近代美術館では、ベルリンでの生活を描いた『雪あかり日記』などの名文を残した建築家谷口吉郎が鹿鳴館の取り壊しを目撃し、そして「明治の愛惜」をつのらせ、明治建築の保存に奔走した「明治村をつくった建築家」として明治村の生い立ちも紹介しています。

「茨城県近代美術館」を設計した吉村順三は、”気持ちの良い建築”をつくりつづけた建築家ですが、小学生の頃から紙で家の模型をつくり、中学時代には、当時創刊されたばかりの建築雑誌を愛読し、しかもその雑誌の「住宅」懸賞募集に応募し、応募した２案が入賞、佳作となったエピソードなども盛り込みました。

ホテルオークラ東京の玄関前に建つ大倉集古館では、世の中のニーズをすべてビジネスにした大倉喜八郎の豪快な生涯の中で、喜八郎が心血を注いだ帝国ホテル新館建設の物語からフランク・ロイド・ライトの逸話にまで展開しています。 また設計者の伊東忠太については「妖怪が生息する建築」の紹介は勿論ですが、伊東のもう1人のパトロン大谷光瑞の壮大なる生涯も描きました。

現代美術をいち早く日本に紹介した「原美術館」の建物を設計した渡辺仁を「マッカーサーに愛された建築家」と表現しました。勿論、この二人は面識はありませんでしたが、終戦後マッカーサーは渡辺が設計した「第一生命館」(実際には設計に関わっておらず、名義貸しのような結果になっています）に連合軍総司令部を置きました。また厚木飛行場に降り立った直後に宿泊した渡辺の力作「横浜ホテルニューグランド」はエピソードの豊富なホテルで、初代料理長サリー・ワイルが「シュリンプドリア」など、名物料理を生み出し、「スパゲッティナポリタン」や「プリン・ア・ラ・モード」が誕生したのもこのホテルでした。また前川國男の弟で日銀総裁も務めた前川春雄や大佛次郎、石原裕次郎も登場します。

碌山美術館では、荻原碌山のアメリカ、フランス留学、そしてロダンとの衝撃的な出会い、そして絶作《女》を生み出すまでの苦悩を描き、また新宿中村屋を創業した相馬愛蔵、黒光の物語から「インドカリー」誕生の歴史まで紐解きました。 また設計者今井兼次はアントニ・ガウディに心酔した建築家として名建築を残しましたが、彼の銀座線建設のための8ヶ月にも及ぶ「欧米地下鉄調査」は、ヨーロッパの近代建築を日本にいち早く紹介することになりました。

埼玉県立近代美術館を設計した黒川紀章は、デンマークのルイジアナ近代美術館の発注者が「とにかく美術館でいちばん大事なところはレストランだ」と言ったことを引き合いに出し、「国立新美術館」では、レストランを大空間の宙に浮かせ、ポール・ボキューズが「世界で最も美しいレストラン」だと称賛しました。

世田谷美術館は、内井昭蔵の「健康な建築」の代表作ですが、建築家内井昭蔵の原点となったニコライ堂にも、多くのドラマが秘められ、日本人女性初のイコン画家山下りんの悲話もそのひとつです。

このように美術館は、さまざまな出会いのつまった賜物だと強く感じています。建築・美術・工芸にもっと関心を持っていただき、より多くの方に美術館に何度も足を運んでいただけるよう、これからも「美味しい美術館」の紹介を続けていきたいと考えています。

坂本直行記念館（現・北の大地美術館）

会員活動レポート

奈良のアート村　視察レポート

安河内敦子
ガラス造形家
㈱意匠計画　代表
日本建築美術工芸協会会員

東京から700Km。無謀にも車を走らせ奈良県吉野郡川上村へ、山崎輝子会員を伴って久しぶりに2泊3日の長距離ドライブを試みた。良くぞ私のこの無謀な計画に山崎会員は同伴してくださったものだ。

aaca会員の大田敏彦氏のご案内で、以前奈良県川上村「匠の聚（たくみのむら）」を訪れ、この村でaacaの元気な女性のグループ展を企画しましょう、というお誘いに魅せられ下見を兼ねて再度訪れたというわけだ。

吉野川の源流にある川上村は、大滝ダム・大迫ダム湖をかかえる水源地の村。川岸いっぱいに迫った山々、整然と植えられた杉や檜は日本最古の人工林。樹齢250～390年生の杉や檜の林が保存されている。

人口２０００人ほどの村は穏やかでとても静かな村だ。

「匠の聚」はそんな川上村の山の上にある。

「匠の聚」は、センター棟･アトリエ棟･コテージ棟などに分かれた施設である。

センター棟には、「匠の聚」全体の管理とアーティストの作品を常設展示するギャラリーや各種アート体験できる工房室などを備え「匠の聚」で暮らすアーティストを中心に、内外のアーティストによる幅広い作品を展示している。 アトリエ棟は8棟あり、アーティストが創作活動を行うアトリエ及び生活空間となっている。

静かな森のアトリエでは、作家たちが「匠の聚」で暮らし、住まいを兼ねたアトリエで創作に没頭している。現在、陶芸家3名、彫刻家2名、日本画家1名の6名が生活している。その内1棟は、かつて「匠の聚」を制作活動の拠点として活躍した川上村出身の洋画家・小西保文の功績を称え、生前の小西画伯のアトリエの雰囲気を残し、小西保文記念館として開館している。

コテージは木造平屋建て5棟。一般の方用宿泊施設で、キッチンが備わり自炊が可能となっている。

早朝に東京を出発し何とか日が暮れる前、5時過ぎに「匠の聚」に到着した。第一日目はこのコテージに泊まった。2段ベッドが2台、木の香りのする室内は夕暮れの戸張を穏やかに包み込み長いドライブの疲れを解きほぐしてくれた。翌朝「匠の聚」を一通り散策し、紅茶とパンの朝食を取っていると大田さんが川上村の木工芸作家山本直美さんを伴って「匠の聚」まで出迎えてくれた。山道を必死に大田さん運転の車の後を追いながら、平地の少ない断崖絶壁ともいえる険しい山肌に張り付くように建てられた民家の間を進んで、山本直美さんの工房「白い犬」を訪問した。

工房では所狭しと檜材が積み上げられ椅子や箱物の製作をされていた。後日、檜の香りが沸き立つ鉋屑で作ったポンポリを送っていただき、しばらくの間、我が部屋は都会の喧騒を忘れさせる川上村の空気に包まれて異空間を楽しませていただいた。

2日目の宿泊場所民宿ログキャビンで夕食に集まってくださった三輪素麺製造元の貝谷製麺所の貝谷さん、お酒が入るほどに会話が弾み、大田さんと俳句のキャッチボール。その優雅なやり取りに私たちはただ聞き入るばかりだった。

川上郷の山里離れた場所におよそ550年前、後南朝哀史で知られる自天王、忠義王の陵墓を守り住んでいる集落がある。三輪素麺製造元の貝谷さんもそのお一人で俳句を嗜み、凛としたその風情になるほどと感じ入った。

大きな自然の中で、この歴史深い川上村に都会からのこのこやってきて、作家としてどんな展覧会が出来るのだろうか？　どう自然と向き合うのか？　川上村の風土をどう読み解けばよいのか？　そして何より作家も鑑賞者も楽しめる展覧会の企画は、どうあったら良いのかと。

大きな宿題を大田会員から投げかけられた旅となった。

「匠の聚」全景

「匠の聚」ギャラリー

歴史の証人　杉

撮影　匠の聚　　川上村職員　上平伸太郎
　　歴史の証人　　村岡章人

第178回　AACAフォーラム　2012年9月28日

「チベット文化から見えてくる今の日本」

岩佐寿弥
映画監督
映画「オロ」製作者

映画監督岩佐寿弥氏は、チベットからインドに亡命した10歳の難民の少年オロに出会い、ご自身が10歳で終戦を体験した頃の自分を思い出し、彼の生活を追って映画「オロ」を製作した。チベットの映画を撮る事で日本のことが見えてくるという。

チベット難民のキャンプでは、日本の戦後の風景が目の前に展開しているようで、子供の頃の生活がよみがえり、その人間関係の姿が監督の少年時代を思い出させた。「人が卑屈ではない。媚びへつらわない。そういうことを知らない、そのような人が作られた文化に興味を抱いた。その背景にはチベット仏教の存在が大きい。自分たちの文化を異国でも大事にしている。第二次世界大戦後、日本は新しく歩み始めたが、大事なものを一緒に捨ててしまったのではないか。」と監督は静かに語りだした。「チベットは高地で空気が薄く、日射しも強く、1日の寒暖の差が激しい。生と死が隣り合わせにある環境である。物々交換と放牧による厳しい生活の中で、我々とは異なる人間が育つ。輪廻転生の信仰がそのまま伝わり、利他の慈愛が深く、現世利益を求めない。それらのことをチベットの人は日常的に身につけている。生きている間には正しい行いをし、天に祈る。風葬、鳥葬を行い肉体に価値を認めない」と、日本とは異なる世界の存在が語られた。仏教信仰の深いチベット人は仏像を眺めずに拝むという。日本人は仏像を見ることから始めるが、色々と異なるようだ。また、「日本は島国の故に外国からの圧力から緩和された環境にある。日本人という民族は他民族に対し無関心でありその無関心さは特別なものがある。グローバル化の時代にあってまずいのではないか。」

「2011年1月に映画はクランクアップし、編集の直前に3.11の大震災が起きた。敗戦の時の国が壊れる感覚がよみがえる。また原発の問題が生じれば、日本の中に難民が現れる。現在は国内におさまっているが、国際法上の難民が現れるかもしれない。そうなればチベットの人と同じ状況になる。人の傷みは理解できないが、その傷みに想像力で近づくことは出来る。3.11の傷みをチベット人は感じる事が出来る。傷みを感じ合える事が喜びで、『得をしたな』と思う。」と監督は言う。

講演終了後受講者から「これからのチベットはどうなるか。」「チベットの人と知り合える機会はどのようにしたらもてるか」等の熱心な質問があった。「何が支えとなっているか」との問いに、「心の中にあるもの『生きとし生けるものを慈しむ心』その大事なものへの自負心が支え。」ということだった。

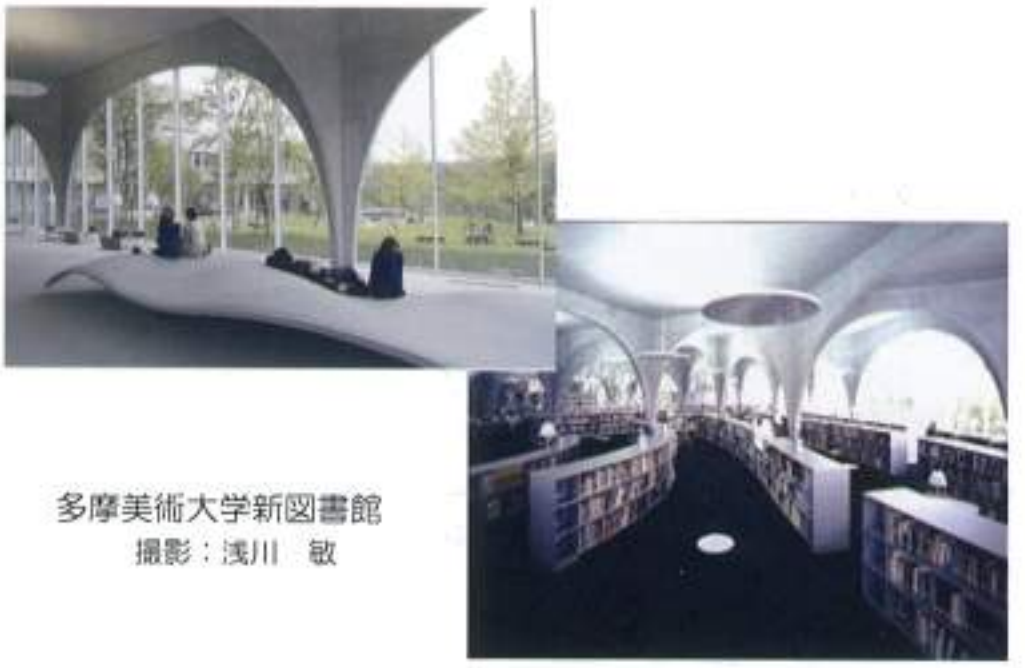
後日、第7回UNHCR難民映画祭の一環で上映された「オロ」を観た。少年オロは初対面の人にも対等に接し、自分の手を温めて老人の手を温めてあげるなど、自然なやさしいふるまいをする少年だった。家畜を放牧に連れて行った時のことを語る表情が生き生きとしていたのが印象に残る。　（aacaフォーラム委員　中野恵美子）

第24回　建築と文化を語る夕べ　2012年7月27日

「人と人をつなぐ場を作るために」

藤江和子
インテリアデザイナー
㈱藤江和子アトリエ
日本建築美術工芸協会会員

建築や分野を超えたデザイナーとのコラボレーションにより、建築計画プランニングに参加、建物に残る数多くの作品を解説され、空間コンセプトを共有し、心地よい建築と家具の新しい有り様を提案された。



多摩美術大学新図書館
撮影：浅川　敏

平成24年度　理事会報告　（主要案件のみ）

・第一回理事会は、7月18日　理事12名（8名は委任状提出）・監事1名の出席を得て建築会館会議室にて開催。
24年度通常総会議事録及び文化庁への23年度事業報告提出の報告、24年度協会会費納付状況等が報告された。
国際コンペティション事業計画、個人会員・法人会員の会費未納者への再請求手続き等が付議され審議の上承認された。

・第二回理事会は　10月17日　理事11名（9名は委任状提出）・監事1名の出席を得て建築会館会議室にて開催。
文化庁実地検査、国際コンペティション審査経過及び結果、24年度協会賞応募状況、古典の日制定等が報告された。
23年度芸術文化復興支援金の預託先、24年度設立記念総会次第、事務職員募集条件等が付議され審議の上承認された。

新入会員・会員の移動　（2012年7月～2012年10月　敬称略）

新入会員

個人会員

信ヶ原良和	〒610-0241	京都府綴喜郡宇治田原町南上ノ山 6-148	TEL 0774-88-3941	成安造形大学
井上勝江	〒150-0036	渋谷区南平台町 4-8-307	TEL 03-3496-9678	版画

法人会員

㈱荒井設計　代表取締役社長　佐々木宏幸　TEL 028-634-6010
〒320-0845　栃木県宇都宮市明保野町　2-10

会員の移動

望月菊磨	個人住所変更	〒255-0004 神奈川県中郡大磯町東小磯 661-20 TEL 0463-61-6786
連　健夫	個人住所変更	〒107-0052 港区赤坂6-4-11　ドミエメロード305
吉田明弘	勤務先変更	㈱ヨシダデザインワークショップ　TEL 03-6902-0108 〒113-0021 文京区本駒込 5-2-5 フローラ本駒込1F
藤江和子	勤務先住所変更	〒150-0033 渋谷区猿楽町 30-8 ツインビル代官山 B-301
TOTO株式会社	法人代表者変更	マーケティング本部　営業情報部長　加藤　徹
氏家清一	勤務先住所変更	〒980-0004 仙台市青葉区宮町 3-9-27 レゾンデトール201 TEL 022-224-3371　FAX 022-224-7681

東日本大震災　「芸術環境復興預金」へ募金のお願い

24年度寄付金（10月末現在）42，702円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、活動団体に50万円の寄付を行いました。24年度も募金で集まりました金額を、芸術環境復興の為活用して行く予定です。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を、募金に協力して戴きますようお願いいたします。

復興預金口座は下記に記載いたしました。

ゆうちょ銀行　港芝五　当座預金　口座名：AACA芸術環境復興預金口
店　番：0一九　口座番号：0338383

会員投稿記事　募集中

会員の皆様の
作品紹介、活動報告、
展覧会、個展等のご案内
企業の広告、出品展等のご案内を
会報に掲載いたします。詳しくは
広報委員会にご相談ください。

会報について
会報への　ご意見　ご希望を
お寄せください。　（広報委員会）

発　行　社団法人　日本建築美術工芸協会
発行人　会長　中島昌信
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20　建築会館6階
Tel　03－3457－7998
Fax　03－3457－1598
Url　http//www.aacajp.com
E-mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
委員長　野口 真理
委　員　飯田郷介　石田 眞人　神谷 ふじ子
竹生田 正　中村 弘子　山崎 輝子
事務局

印刷協力　美和野印刷株式会社